十二の不思議抄

　　　　　　　　　　　　　　上野博隆

　第一の諌暁は、この時代を担う新しい本尊を顕し「顕元初本尊開示抄」を書いた時に行いました。

　第二の諌暁は、元初の南無妙法蓮華経と末法との違いを顕した「観心三界抄」を書いたときに行った。

　今、第三の諌暁を行うのは、十二の不思議が起こったからである。

　その不思議とは、

一、像（仏・菩薩・神）の心を洗う。

二、海を洗う。（修羅）

三、山を洗う。（地獄・餓鬼・畜生）

四、（輪王・人・帝釈）の病魔を洗う。

五、梵天の心を洗う。

六、宇宙（月・太陽・大気）を洗う。

七、縁（リレーション）同体を結ぶ。

八、神通力（声聞）声を聞く。

九、経（経典、聖書、コーラン）の力が蘇る。

十、無情の命を仏に帰依せしめる。

十一、体宇宙の本尊を顕す。

十二、虚空会の儀式を行う。

一、像（仏・菩薩・神）の心を洗う。

　世界には、仏様、菩薩、神様の像が多数ある。信仰の対象に成っている。像を崇（あが）めて内なる心は湧出するものなのか、爾前の神仏であり、末法では力乏しい。しかし、時は元初である。元初では「南無妙法蓮華経」を宇宙の始まりの心の名とする。未来から過去を変える義なり（※注１）。活神仏なり。皆是仏法なり。その所以は、始まりの心は有情非情を問わず全ての生命にあるからである。本来、全てに「南無妙法蓮華経」の心は備わっているのである。以前に創られた像にも力があるのである。全てにその心は有る。それでは、三身あるか。総閻浮提総与の光と影の本尊を顕せり。人の影を創れば、手の影出来る。爾前の像も我が本尊の手なり。全て法身、報身、応身、三身即一身の仏なり。元初の仏なり。祈りて三界の王の心が湧出せんか、しないわけはない。

　二、海を洗う。（修羅）

　海に生きる生物は修羅である。争い、食うか食われるかの世界である。しかし、調和を保っていた。

　大海に八の不思議あり。「一つ漸漸に転（うた）た深し、二に深くして底を得難し、三つに同一の鹹味（かんみ）なり、四つには塩限りを過ぎず、五つには種種の宝蔵あり、六つには大身の衆生、中に在りて居住す、七つに死屍（しし）を宿せず、八つには一切の万流・大雨、之に投ずるに増さず減らず」簡易に説明すると。「①大海には、様々な命があるが全てそれぞれの生命を全（まっと）うする。②大海は底が深くて分からず、どんな生命があるかまだ不明だし、どんな営みが海で行われているか全部は解明されていない。③いろいろなものが流れ込むが海は全ての生命に鹹味（利益）をもたらし命を育（はぐく）む。④波は一定のリズムを生む。⑤種々の宝とは、種々の生命なり。命が宝なり。⑥大きな体と知恵をもった生き物が暮らす。⑦生命の循環があり、無駄はない。死骸もすべて自然に帰る。⑧水位が一定である。」

　しかし、近年、プラスチックの溶けない塵（ちり）。温暖化による水位の異常。八つの不思議を壊すものである。御本尊にしたためし「死の神仏」の『物の仏』の力により、ものの寿命を定め成仏させる。害をなくす。つまり一つの不思議を加える。ものの死による功徳。もの自体の成仏。今、元初の題目を唱え地球に降らし注ぐは、「南無妙法蓮華経」の功徳を大海に利し自然の法理を従えるなり。

　三、山を洗う。（地獄・餓鬼・畜生）

　嗔（いかる）は地獄・貪（むさぼ）るは餓鬼・癡（おろか）は、畜生。地震や火山の噴火（ふんか）は大地が嗔っている。動物。飢餓（きが）。

　動物が山から下り人里の生活を荒らす。山の幸が無くなりつつある。動物も毒され雑食になっている。山に自然の命を宿す力が弱まっている。命を与えなければならない。それは仏の働きの弱まりであり、命を自然の摂理に従わせなければいけない。そのことは、この御本尊に対する祈りの力が叶えてくれる。唱える命を山へ自然へ供養しなければならない。

　地震は、宇宙のエネルギー論で解明すべきである。人に対する神仏の怒りのエネルギーか。十善戒を守らぬ人への怒りか。大悪きたれば大善きたるか。災害による人の死は悲しい。喜べない。私は、使命の大きさに涙する。大悪を止めなければならない使命感。今を定めん。あなたも未来を定める一人である。大善とは、末法の終わりであり元初のはじまりを宣言し、元初の本尊、題目を広める時である。それを認める時である。

　人口増加は、飢餓の原因である。ある意味、自然の摂理として意味がある。政治の問題かもしれないが人口のグローバル化を進める時かもしれない。そして人は生きているだけでは意味がない。本来、生命は平等、無量無辺、境が無い。生きるとは、教育を受け、生活できる仕事と生きがいがなければならない。生きるとは、そう言うことです。宗教家の課題かもしれないし政治家の課題かもしれないが、生命の無量無辺の哲理の勧めである。

　四、（輪王・人・帝釈）の病魔を洗う。

　輪王は、偉業を達成した人。人は普通に暮らす人。使命が大きいか、縁があるか。病と立ち向かう輪王あり。病を克服するものあり。証なるか。

　帝釈は警察、軍人なり。悩み多い職業なり。仏心無くば出来ない仕事である。病に侵されることあり、精神を病むことあり。犯罪を防ぐ立場が犯罪に落ちる。

　此の御本尊は善に働く。心を強くする。速成熟善身なり。心を洗うなり。祈れば苦難を乗り越え、病を治し、心清浄なり、体清浄なる。

　五、梵天の心を洗う。

　梵天とは、政治家、有力者、権力者。その者に三界の王の心を理解せしめる。信仰するものが律法者でなければならない。過去世で十善戒を守った人が梵天となる。しかし、決して宗教の権力者であってはならない。そして、今も十善戒を守らなければならない。権力の欲と戦わなければならない。民衆とは何か。民衆の利益とは何か。しかし、利害で動けば、権力利用である。何の指針で動くか。仏の実相。生命の実相。善のもつ実相。相ありて性となり体となり力となり作を施（ほどこ）し因をつくり縁と為し果を得、人は国土に報いるなり。政治を志すもの実相とは何か能々考えるべきなり。心を洗うとは、実相を純粋に見る目を観ずるなり、理想の社会と言っても遠くにあるものではない。生命の実相に他ならない。

　六、宇宙（月・太陽・大気）を洗う。

　大気汚染。温暖化。天候不順。大型台風。この本尊に「天皆尊（あまのみなのみこと）」を記す。それは、自然崇拝。自然を大切にし従う心です。自然に従えば自然環境を破壊することは無くなる。環境汚染を防ぐには文明の力を見せるしかない。文明の罪は文明で償うべきである。

　七、縁（リレーション）同体を結ぶ。

　同体同心、異なる本位。リレーション。我復於彼中である。速成熟善身。宿業を半分背負い善身を分ける。主体自身がしっかりと信仰をしなければならない。器は、社会、宗教、組織を超えてリレーションする存在である。本尊は全宇宙なり。御本尊の相なり。本尊は本尊のリレーション。体は体のリレーションなり。善に帰依する体こそ大切である。包括する体こそ必要である。

　八、神通力（声聞）声を聞く。

　声を聴くとは、法を学ぶことである。観ずることである。宇宙を観ずる。自然を観ずる。善く観ずるをもって声を聴くとなす。ただ、心の声を聞くことがあっても飲まれるなかれ、善（ぜん）であることが大切である。万一の事態あれば心を一にし静かに題目を口ずさむべし。言葉をもって作用するを力と言う。神通力とはそう言うもので言葉である。

　九、経（経典、聖書、コーラン）の力が蘇る。

　善を持って文を判ずるを経蘇る義と言うなり。解釈を間違うなかれ、命大切は共通の価値なり。価値は、善・理・美なり。神仏の力、経（経典、聖書、コーラン）に宿る。神仏が善を行い善を判ずる行いを信じ、民衆が、権力者が、律法者が、それを見てどうなるかを見、どう対処したかを観ずる力が大切である。時代が変わっても心は同じである。如説修行である。

　十、無情の命を仏に帰依せしめる。

　道具の成仏。ＡＩの発達。殺人の道具。道具自体は言葉を喋（しゃべ）ったり拒否することは出来ない。しかし、ものも祈りがある。心して道具を造り扱うべきなり。それをもって仏に帰依すると言う。人を傷つけるなかれ。もの悲しむなり。この御本尊への祈りは、ものの心を和らげる。

　十一、体宇宙の本尊を顕す。

　脳に体あり、五体に心有り。二つの本尊の所以なり。ただ、それであって脳体不二である。

　脳の核の本尊を主の本尊とし、体の臓器を現す補佐の本尊を顕す。これは、臓器の働きを正しくして、健康にするためである。体の病を止めるなり。本尊は宇宙である。この御本尊も光と影である。

　十二、虚空会の儀式を行う。

　虚空会の儀式を行った。始まりの時に元初久遠如来が集まる。そして、宇宙が始まる。

　以上をもって十二の不思議と為す。これを持って、因果具時より実証となすべきか、現れし証もありまだ無きものもある。が第三の諌暁をし元初の正法を勧め実証を確定せしめるものである。

　（※注１）未来から過去を変える義は「顕元初本尊開示抄」の「久遠名義の義」を参照。

※補足

　　十善戒。

　唱えるもの十善を自然に保つなり。十善戒を捨てずにあらず。小を守らずして大を守れるや。如何。

大事をなす。小事をおろそかにするべからず。

大事、小事を含まずや。

自然に得る、それを「捨てる」とも言うなり。

（用語）十善

殺生、偸盗（ちゅうとう）、邪淫、妄語、奇語、悪口、両舌、貪欲、瞋恚（しんに）、愚痴を行わず。

（御書）

王となる人は過去にても現在にても十善を持つ人の名なり。

名はかはれども師子の座は一也。